

国立国語研究所学術情報リポジトリ

『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用： 直喩へのアノテーションの事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): joshi, jodoshi, simile, construction, The Corpus of Japanese Figurative Language 作成者: 小松原, 哲太, KOMATSUBARA, Tetsuta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003687

『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用

——直喩へのアノテーションの事例——

小松原哲太

神戸大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』を表形式のデータベースとして電子化し、助詞と助動詞の用法の体系的な記述枠組みとして利用できるようにした。本論文では、その電子化の基本方針とデータベースの内容を概説した。著者は、このデータベースの応用例として、『日本語レトリックコーパス』に収録された直喩のすべての用例を対象として、その構文形に含まれる助詞と助動詞の用法のアノテーションを行った。アノテーションの対象となった助詞、助動詞のほとんどすべての用法について、一貫性のある分類を行うことができた。その結果、直喩には、特定の助詞と助動詞が生じやすく、それぞれの語の用法の頻度にも著しい偏りがあることが分かった。本論文で示した事例分析の成果は、任意の日本語データに含まれる助詞・助動詞の用法分析を行う上で、このデータベースが汎用性の高い記述枠組みとして利用できる可能性を示唆している*。

キーワード：助詞、助動詞、直喩、構文、『日本語レトリックコーパス』

1. はじめに

『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』（国立国語研究所 1951a；以下『現代語の助詞・助動詞』）は、実際に使われた助詞・助動詞の意義・用法を分類整理して、その実情を明らかにすることを目的に編纂された助詞と助動詞の包括的な記述資料である。山崎・藤田（2001: 3）によれば、この資料の編纂を担当したのは文章論で知られる永野賢であるが、永野は『昭和 24 年度国立国語研究所年報—1—』（国立国語研究所 1951b）のなかで、文法を「単語から文節を構成し、文節から文を構成する際の法則」（同書、p.86）とした上で、文法の主要問題として、用言の活用と助詞・助動詞を挙げ、これらを「単語が互に接続する方法や、文節が相互に関係するしかた、表現全体のしめくりなどを示す形態的指標」（同書、p.87）と位置づけている。永野は、現代語の助詞・助動詞に関する実態調査の基本方針としては、「多数の読者をもつ代表的な新聞や雑誌から、助詞・助動詞の使用例を集め、これを文法的意義・用法によって分類し整理する」（同書、p.87）という方策を挙げている。『現代語の助詞・助動詞』は、この方針にもとづく実証的調査の知見の集

* 本稿の一部は国立国語研究所の令和 3 年度共同利用型共同研究（登録型）『『現代語の助詞・助動詞』の電子化及び整理』（プロジェクトリーダー：小松原哲太）の研究成果である。プロジェクトのコーディネータである浅原正幸先生に感謝申し上げたい。国立国語研究所の第 233 回 NINJAL サロンにて、本プロジェクトの成果について発表する機会を得た際、松本曜先生、山崎誠先生、柏野和佳子先生から示唆的なコメントをいただいた。本稿の研究成果は、科研費若手研究「レトリックの構文体系の実証的研究：比喩表現の構造と機能」20K13016（2020 年 4 月-2023 年 3 月・研究代表者：小松原哲太）の助成を受けている。『日本語レトリックコーパス』のアノテーションに関する研究成果は、菊地礼氏、春日悠生氏による研究協力にもとづいている。両氏に心から御礼申し上げます。

大成であると言える。

本論文ではまず、2021年度の国立国語研究所共同利用型共同研究「『現代語の助詞・助動詞』の電子化及び整理」において作成した『現代語の助詞・助動詞』データベース版（以下、本データベース）の概要を説明する（2節）。『現代語の助詞・助動詞』の分類体系を表形式のデータベースとして電子化したことにより、日本語の助詞、助動詞の用法分類の情報付与を行う際の一貫性のある枠組みとして利用できるようになった。日本語のデータを分析して各語に一貫した情報を与える上で利用できる既存の電子化されたデータベースとしては『分類語彙表一増補改訂版一』（国立国語研究所、2004年；以下『分類語彙表』）のデータベース版がある。『分類語彙表』は一般の小型国語辞典に相当する規模のデータベースであり、国立国語研究所による語彙調査において使用率の高かった一般的な語はほぼ収録されている（柏野 2006）が、助詞・助動詞はほとんど収録されていない（山崎 2020）。『分類語彙表』の質的拡張を試みる山崎（2020）によれば、サンプルテキストのすべての語に対して、『分類語彙表』で分類番号が付与できたのは全体の50%前後であるが、もし助詞・助動詞と補助記号、空白に分類番号を付与することができれば、全体の約95.8%をカバーできる。したがって、助詞・助動詞の網羅的な分類を可能にする本データベースは、日本語の語の包括的記述を行う上で、『分類語彙表』のカバーしていない語の範囲を補うデータベース資料であると言える。

本論文ではさらに、本データベースの応用例として、『日本語レトリックコーパス』に収録された直喩へのアノテーションの事例を紹介する（3節）。『日本語レトリックコーパス』では、様々なレトリックの用例に意味論、文法論、語用論の各観点から多角的なアノテーションを行うことを目指している（Komatsubara 2021）。なかでも直喩は、比喩的な意味と文法形式が緊密な関係をもつレトリックであり、主に助詞と助動詞からなる構文構造の分析が、直喩の分類の鍵になる（小松原・田丸 2019）。直喩によく使われる助詞や助動詞のアノテーションの結果を、本データベースの応用例として示し、日本語のデータに文法的なアノテーションを行う上での本データベースの意義を論じる。

2. 『現代語の助詞・助動詞』の電子化

『現代語の助詞・助動詞』は、現代日本語の助詞、助動詞の意味用法を、事例の収集と分類にもとづいて網羅的かつ体系的に記述した資料であり、日本語の文法の記述枠組みとして有用であるが、電子化されていないため利用できる用途に限られていた。著者は、本資料を電子化し、表形式のデータベース「『現代語の助詞・助動詞』データベース版」(info:doi/10.15084/00003531)を作成した。具体的には、各形式の各用法に対して分類番号を付与し、各用法に対して具体例を紐づけたデータベースとして整理した上で、適切なオープンライセンスで外部公開した。

『現代語の助詞・助動詞』データベース版は、以下の書籍（以下「原文テキスト」）に記載されたすべての用法と事例の一部を電子化し、表形式のデータベースとして整形したものである。電子化の底本には、『国立国語研究所学術情報レポジトリ』において公開されている原文テキスト第7版（1980年）のPDFファイルを用いた。

国立国語研究所〔永野賢〕(1951a)『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』国立国語研究所報告 3. 秀英出版. info:doi/10.15084/00000991

『現代語の助詞・助動詞』は、1949年4月から1950年3月までに刊行された新聞・雑誌を調査資料とした、現代語の書き言葉と会話文における助詞・助動詞の用例約48,000例にもとづいて、助詞・助動詞の意義・用法を細かく分類し、それぞれにいくつかの用例を付したものである。75種類の助詞と、27種類の助動詞が記述対象となっており、代表的な助詞と助動詞はほぼ網羅的に収録されている。以下に用法記述の具体例を示す。用例出典は略号で示されており、例えば「エコ, 12.11, 33」であれば『エコノミスト』の1949年12月11日付33ページを意味し、「婦友, 6, 87」であれば『主婦之友』の1949年6月号87ページを意味する。

・助詞・「から」・[II] 接続助詞・用法1 (原文テキスト, pp.35-39)

- [用法] 原因・理由をあらわす。表現者が、前件を後件の原因・理由として指定して結びつける言い方。すなわち、「ので」に比べて、条件としての独立性が概して強い。(既定の順説条件。「ので」に近い意味で用いられることもある。)
- [用例] 以上の次第でポンド下落で英連邦からくる穀物、綿花、羊毛、石油などすべて割安で沢山輸入されるから、これらの関連産業は原料も豊富で稼働率が高まる。

(エコ, 12.11, 33)

・助動詞・「ようだ・ようです」・用法3・連体形 (原文テキスト, p.277)

- [用法] 例示の意味を表わす。(ある事物が他の事物に関する一例であるような関係。)
- [用例] 玉子に慣れたら、黄粉、鶏や牛の肝臓の裏漉、大豆味噌の味噌汁、煮干粉、ひらめ、かれい、きすの**ような**脂肪の少い魚肉などを、一品ずつ慣らしてゆきます。

(婦友, 6, 87)

以下の方針に沿って、原文テキストを電子化した。原文テキストに記載された用法のすべてと用例の一部を電子化し、表形式に整形してデータベースとする。各用法について、原文テキストで最初に挙げられた用例のみを代表例として記載する。用例に含まれる旧漢字、旧仮名遣いは、読みやすさを重視して、現行漢字、現代仮名遣いに改める。「助詞 - から - 接続助詞 - 用法1」のように、分類を階層化して、分類番号を付与し、助詞・助動詞の体系的な用法アノテーションの枠組みとして使用できるようにする。

本データベースは、表1に示す11列からなるcsvデータである。最右列に例を示す。(1)「分類1」は原文テキストの第一部「助詞」と第二部「助動詞」の区分に対応する。(2)「分類2」は、「から」「ようだ・ようです」といった、助詞75種類・助動詞27種類の見出し語に対応する。(3)「分類3」は、助詞については「格助詞」「副助詞」「係助詞」「接続助詞」「並立助詞」「準体助詞」「終助詞」「間投助詞」の8分類、助動詞については「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「假定形」「命令形」の6分類に対応する。(4)「用法番号」として各形式の用法の通し番号を付した。すべての用法番号の合計は547となった。原文テキストでは用法が(5)「用法1」(6)「用法2」

(7)「用法 3」と段階的に区分けされている（ただし、体系的な階層性をもつわけではない）。(8)「例」には各用法に 1 つの用例を記し、原文テキストの太字強調箇所をアンダーバー 2 つで囲んで強調した。(9)「出典」にその出典の略号を記載し、用例が挙げられていないものには「例文なし」と記載した。(10)「関連する接続形式・呼応形式・連語」とは、助詞や助動詞の「組み合わせを、いわば一つの単位と認めて、このような種類の用法をできるだけたくさん見つけ出す」（国立国語研究所 1951b: 88）という方針の下で収録された 2 語以上の組み合わせである。例えば上で例示した接続助詞「から」の用法 1 では、「～は～からだ」「～からは」「～からには」「～ものだ（です）から」「だ（です）から」という形式が挙げられている。これについては本データベースでは用例を記載しなかった。(11)「文法的接続・備考」には、原文テキストに記されたその他の記述内容をまとめて記載した。

表 1 『現代語の助詞・助動詞』 データベース版の構成

列	列名	摘要	例
1	分類 1	助詞 / 助動詞	助詞
2	分類 2	文法形式	も
3	分類 3	助詞については文法分類, 助動詞については活用形	係助詞
4	用法番号	各分類の用法の通し番号	8
5	用法 1 (1, 2, 3, ...)	用法の分類	事情の類似した他の事物の存在を暗示し, 類推させる形で, ある事物を提示する。
6	用法 2 (イ, ロ, ハ, ...)	用法 1 の下位分類	当面の事物が, 既知のもの, または予想されたものと同様であることを示す。
7	用法 3 (a, b, c, ...)	用法 2 の下位分類	主語。
8	例	原文テキストに収録された各用法の用例のうちの最初の用例	そう言われると数絵 __ も __, ついその気になり病気でもないお嬢さまを病人あつかいにするはたの人達の方がいけないのだと思いました。
9	出典	例の出典	ひま, 6, 52
10	関連する接続形式・呼応形式・連語	各用法に関連する形式として記載された形式	～もあろうに
11	文法的接続・備考	助詞・助動詞の文法的接続およびその他の備考	—

本データベースの各用法には、『分類語彙表』と整合性のある分類番号の付与が提案されている（浅原正幸，私信）。『分類語彙表』と本データベースを併せて用法アノテーションの枠組みとして用いることで、任意の日本語データに生起するほとんどの語に対して、分類番号を付与することが可能になる。次節では、本データベースを実際のアノテーションに使用した例を示し、その応用可能性を論じる。

3. 直喩へのアノテーションの応用例

本データベースは、任意の日本語データにおいて助詞や助動詞の用法を分析し、どのような用法が多くみられるかを調査するための枠組みとして利用できる。本節では、応用例の 1 つとして、

『日本語レトリックコーパス』に収録された直喩の用例に対して、本データベースによる助詞・助動詞の用法アノテーションを行った試みを紹介する。以下では、まず 3.1 節で『日本語レトリックコーパス』の概要を説明し、3.2 節でアノテーションの作業手順を述べる。3.3 節から 3.5 節では、助詞、助動詞、それらの組み合わせからなる構文の分析結果をそれぞれ示す。

3.1 『日本語レトリックコーパス』

レトリックは、多彩な表現効果を引き出す言語技巧である。『日本語レトリックコーパス』(The Corpus of Japanese Figurative Language; J-FIG) (以下 J-FIG) は、典拠のある多数の用例をアーカイブしており、誰もがウェブ上で容易に参照できるインターフェースをもつレトリックの用例コーパスである。J-FIG は、認知言語学 (cognitive linguistics) の用法基盤モデル (usage-based model) を背景としており、具体的な用例の観察と分析にもとづくボトム・アップな一般化によって、日本語のレトリックの包括的な記述を行うことを目指している (Komatsubara 2021)。各用例には、文彩の分類を行う修辞学的アノテーション、語彙の意味と概念写像の分析を行う意味論的アノテーション、文法構造と構文の情報を付与する文法論的アノテーション、修辞的效果の記述を行う語用論的アノテーションからなる、言語分析のアノテーション情報が付与されている。このアノテーション情報によって、文彩、意味、文法、効果の分類見出しから用例を逆引きしたり、用例の分布の偏りを調べたりすることができる。

J-FIG の意味論的アノテーションでは、『分類語彙表』を語彙分析の枠組みとして使用し、その分類番号を利用することで、隠喩 (metaphor) や換喩 (metonymy) を中心に語の意味的転移の体系的なコード化を行った。比喩は意味的な現象であるとしばしばみなされているが、意味的転移の明示的な言語的指標を伴う直喩 (simile) の場合は、文法形式の機能が比喩の意味伝達において重要な役割を担う。直喩には特徴的な助詞 (例えば「の」) や助動詞 (例えば「ようだ」) が多様な組み合わせで生起する (中村 1977, 小松原・田丸 2019)。どのような助詞や助動詞が直喩に用いられるのかを記述するためには、『分類語彙表』だけでは不十分であり、本データベースを利用することが有益であると考えた。以下に示すのは、本データベースを用いた J-FIG の文法論的アノテーションの手順と結果である。

3.2 アノテーションの手順

J-FIG に収録された直喩の多くの用例を観察すると、直喩に使用される助詞や助動詞にはパターンが存在することが分かる。例えば、以下の 3 例には「A は B のように C」という共通の文法構造があり、これによって A が B によって喩えられている。具体的には、(1) では「火」が「水」に、(2) では「川」が「亜鉛板」に、(3) では「瞳」が「宝石」に喩えられている。ここでの「A は B のように C」という構文は係助詞「は」、格助詞「の」、助動詞「ようだ」の連用形といった文法的要素から成り立っている。「A は B のように C」における「は」「の」「ようだ」のような、喩える概念と喩えられる概念の対応を表す構文の要素となっている文法形式の用法を記述することが、J-FIG の文法論的アノテーションの目的である。以下、本論文では例文の下線

は直喩の構文形を示す。

- (1) 山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているようです。
(宮沢賢治「よだかの星」; J-FIG: a0122¹)
- (2) 橋の上から見ると、川は垂鉛板(とたんいた)のように、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸気その上に眩しい横波の鍍金(めっき)をかけている。
(芥川龍之介「ひよっとこ」; J-FIG: a0041)
- (3) いかなる意味をも鮮やかに表し得る黒い大きい瞳は、場内の二つの宝石のように、遠い階下の隅からも認められる。
(谷崎潤一郎「秘密」; J-FIG: a1041)

各用例へのアノテーション作業は、次のような手順で行った。(1)の「火」を「水」で喩える直喩の記述を例として挙げる。

1. 比喩の焦点となる語と比喩のスコープを決定し、比喩のスコープを含む節(あるいは文、テキスト)の構文形を記述する。語彙はA, B, Cのようにスロットとして表記する。語彙的な修飾表現は省略する。(例)「AはBのようにC」
 - 比喩の焦点とは、比喩的意味をもつ語である(小松原 2016a: 53-60)。(例)「水」
 - 比喩のスコープとは、焦点から喚起される写像(すなわち、起点領域(source domain)と目標領域(target domain)の概念の対応関係; Lakoff (1993) 参照)の要素を表す表現の範囲である。(例)「山焼けの火は、だんだん水のように流れて」
 - 比喩のスコープが連体修飾節を含む場合、修飾部と被修飾部をハイフンでつないで表記する。例えば、「まるでトランプのキングのような微笑を浮かべている男」の構文形は「まるでAのようなBをC-D」となる。
 - 比喩的な写像に直接的に関係すると思われる語彙的表現については、省略、スロット化を行わず、構文形の記述対象として残した。例えば、「まるで」「思う」などの表現である。どの語彙的表現を残すかについては、アノテーション作業を進める上で作業者の合議によって決めた。
2. 文法形式ごとに統語的依存関係を抜き出し、これを用法のアノテーション単位とする。複数の語が結合して1つの統語的依存関係をつくる場合は、アノテーションの対象ではない語を角括弧でくくり、複数のアノテーション単位に分割する。例えば、(1)については、「は」「の」「ように」の3語に関する以下の3単位の用法のアノテーションを行った。
 - 「AはC」(「火は流れて」の「は」)
 - 「Bの[ように]C」(「水のように流れて」の「の」)
 - 「B[の]ようにC」(「水のように流れて」の「ように」)
3. 各単位の用法を、『現代語の助詞・助動詞』データベース版を使用して分類する。構文形に含まれる「まるで」「思う」などの語彙的表現については『分類語彙表』を用いて分類

¹ 用例の出典に記されたコロン以下の文字列(例えば「J-FIG: a0122」の「a0122」)はJ-FIGの用例IDを表す。

する。例えば、上記の3単位については、以下のように分類した。

- 助詞 - 「は」 - 係助詞 - 用法 1：提題。（「も」参照。）一般的事物に対する判断の主題を提示する。
- 助詞 - 「の」 - 格助詞 - 用法 25：“ようだ” “ごとし” で受ける場合。
- 助動詞 - 「ようだ・ようです」 - 連用形 - 用法 1：ある事物が他の事物に似ているという意味を表す。「ようです」は、丁寧な言い方。

以上の手順によって、日本語文法と比喩の専門的知識を持つ3人の作業者によって、J-FIGに収録された直喩の用例 893 例を対象として、主に助詞と助動詞の用法に関する分析およびアノテーションを行った。アノテーションに確信が持てない場合は要検討用例として情報共有し、作業者全員が合意するアノテーション内容となるように努めた。以下に示すのは、助詞と助動詞のアノテーションと構文形に関する基本的な統計である。

3.3 助詞

表2は、10例以上の直喩に観察された助詞の用例数と、主な用法が占める割合を示している。「主な用法」とは用例数が10以上の用法であり、1, 2, 3の順に用例数が多いことを示す。表3は、データベースにおける主な用法の記載内容である（表2の最下段に位置する「より」には主な用法がなく表3からは除外した）。

表2 助詞の用例数と主な用法の割合

助詞	主な用法 1	主な用法 2	主な用法 3	その他の用法	合計
の	440 例 (80.7%)	32 例 (5.9%)	20 例 (3.7%)	53 例 (9.7%)	545 例
は	256 例 (78.8%)	50 例 (15.4%)	—	19 例 (5.8%)	325 例
が	163 例 (90.1%)	10 例 (5.5%)	—	8 例 (4.4%)	181 例
て・で	67 例 (64.4%)	17 例 (16.3%)	—	20 例 (19.2%)	104 例
に	42 例 (42.4%)	14 例 (14.1%)	11 例 (11.1%)	32 例 (32.3%)	99 例
と	27 例 (31.4%)	16 例 (18.6%)	12 例 (14.0%)	31 例 (36.0%)	86 例
を	68 例 (93.2%)	—	—	5 例 (6.8%)	73 例
も	18 例 (34.0%)	—	—	35 例 (66.0%)	53 例
か	11 例 (50.0%)	—	—	11 例 (50.0%)	22 例
ほど	11 例 (64.7%)	—	—	6 例 (35.3%)	17 例
より	—	—	—	10 例 (100.0%)	10 例

100例以上に観察された、直喩によく用いられる助詞は「の」「は」「が」「て・で」であった。多くの助詞で特定の用法が大きな割合を占めた。例えば、「の」の場合は主な用法3つの合計が「の」の用例全体の約90%を占め、特に助動詞「ようだ」「ごとし」で受ける用法が440例で約80%を占めた。これは、直喩に用いられる構文に「の」が使われる場合は、(4)に示す「のよう」や、(5)に示す「のごとく」といった形で用いられることが多いことを示している。

- (4) ある日ふと気が付くと、窓の風（しらみ）が馬のような大きさに見えていた。
(中島敦「名人伝」；J-FIG: a0773)
- (5) 泥棒とは云っても彼ぐらいの智能犯になると、兇器などというものは所持してもいいし、使ったこともない。温泉旅館というものの宴会、酔っ払い、混雑という性格を見ぬき、万人の盲点について、悠々風のごとくに去来していたにすぎない。
(坂口安吾「湯の町エレジー」；J-FIG: a1827)

表3 助詞の主な用法と用例数

助詞	主な用法1	主な用法2	主な用法3
の	格助詞 - 用法 25- "ようだ""ごとし"で受ける場合 (440 例)	格助詞 - 用法 17- 属性を表わす連体修飾用法。同格の関係で修飾する。同じ内容を違った語で表現して結びつける際のつなぎ。(32 例)	準体詞 - 用法 2- 判断辞と結びついて、根拠のある説明、理由の提出、回想、二重判断、強調などの意を表わす。(20 例)
は	係助詞 - 用法 2- 提題。「も」参照。) 現前のもの・既出のもの・特別の限定詞によって指示されたものなどに関する判断の主題を提示する。(256 例)	係助詞 - 用法 1- 提題。「も」参照。) 一般的事物に対する判断の主題を提示する。(50 例)	—
が	格助詞 - 用法 1- 主語を表わす。(163 例)	格助詞 - 用法 3- 格助詞「の」に同じ。(後続の動作性の体言客語を表わす場合が多い。)(10 例)	—
て・で	接続助詞 - 用法 7- 補助用言に連なる用法。(動作・作用の様態の描写) (67 例)	接続助詞 - 用法 4- 並列・列叙・添加・対比。(形容詞・形容動詞に附く場合も含む。)(17 例)	—
に	格助詞 - 用法 17- 動作・作用のよりどころ・由来。比較の基準となる事物。(42 例)	格助詞 - 用法 8- 動作・作用の到達する地点・状態。成り行く状態・結果。(14 例)	格助詞 - 用法 9- 動作・作用の到達する地点・状態。変化・帰着させる状態。(11 例)
と	格助詞 - 用法 5- 動作・作用・状態の内容を示す。次に来る動作・作用の内容を指定する。(27 例)	格助詞 - 用法 3- 比較の基準としての対象。(16 例)	格助詞 - 用法 9- 動作・作用・状態の内容を示す。副詞語尾。(擬声語・擬態語をうける場合を含む。)(12 例)
を	格助詞 - 用法 1- 他動性の動作・作用の目的・目標。(68 例)	—	—
も	係助詞 - 用法 17- 強調。(18 例)	—	—
か	副助詞 - 用法 2- その他の語について、疑問の気持で推定する意味を表わす。(11 例)	—	—
ほど	副助詞 - 用法 2- ある事がらを挙げ、それによって、動作や状態の程度を示す。(11 例)	—	—

しかし、上位に来ているものが、必ずしも直喩を特徴づけるような助詞の用法であるとは限らない。例えば、「は」の2つの主な用法は提題であり、全体の約94%を占めるが、「は」は多くの場合に提題の機能をもつので、「の」の場合とは違い、主な用法が必ずしも直喩の構文の特色となるようなものではない。むしろこの結果は、「は」が提題を、「が」が主語を表す、といった

日本語の一般的な文法機能が、直喩のなかでも有効に働いていることを示している。主題を示す「は」、項構造を作る格助詞「が」「を」「に」「と」、アスペクトやダイクシス、受益関係などを表す「て・で」の補助動詞に連なる用法（例えば「てしまう」「ていく」「てくれる」）といった、日本語の中核的な文法要素が直喩の構文を構成していることは、直喩の文法的な特色を分析する上で示唆的な結果であると言える。

3.4 助動詞

表4は、10例以上の直喩に観察された助動詞の用例数と、主な用法が占める割合を示している。助詞の場合と同様に、表5に主な用法を示す。（表4の最下段に位置する「ない」には主な用法がないため表5からは除外した）。

表4 助動詞の用例数と主な用法の割合

助動詞	主な用法1	主な用法2	主な用法3	その他の用法	合計
ようだ・ようです	334例 (60.6%)	199例 (36.1%)	11例 (2.0%)	7例 (1.3%)	551例
た・だ	64例 (62.7%)	17例 (16.7%)	-	21例 (20.6%)	102例
だ	44例 (47.8%)	26例 (28.3%)	18例 (19.6%)	4例 (4.3%)	92例
ごとき	73例 (81.1%)	13例 (14.4%)	-	4例 (4.4%)	90例
みたいだ・みたいです	10例 (58.8%)	-	-	7例 (41.2%)	17例
ない	-	-	-	12例 (100.0%)	12例

直喩によく用いられる助動詞は「ようだ・ようです」が圧倒的に多く、次に「た・だ」「だ」「ごとき」が続いた²。これらのモダリティに関わる助動詞は、直喩にしばしば用いられるものである（小松原 2016a: 212-216, 2016b）。「みたいだ・みたいです」のような口語体の助動詞と比べて「ごとき」という古い文語体の助動詞が多いのは、J-FIGに現在収録されている用例が明治から昭和にかけての文学テキストから採られたものであるためであると考えられる。

「ようだ・ようです」に関しては、活用形の頻度に大きな偏りがみられた。最も多いのは連用形「ように」（334例、約61%）で、次に連体形「ような」（199例、約36%）、最後に終止形「ようだ」（11例、約2%）であった。直喩の例として、「人生は旅のようだ」のような終止形「ようだ」を用いた用例が典型例のように示されることがある。しかし、この結果は終止形「ようだ」を用いた「AはBようだ」という構文形が必ずしも直喩の典型例とは言えないことを示唆している。例えば、「旅」で「人生」を喩える場合であれば、「人生は旅のように続いていく」や「人生は旅のようなものだ」といった連用形や連体形の用例の方が、より多く用いられる構文パターンである可能性がある。次に挙げる（6）は連用形、（7）は連体形の用例である。連用形が多く、次に連体形が続くという傾向、およびその割合は、菊地（2021）による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の「ようだ」の比喩用法の活用形に関する大規模な調査結果とほぼ一致した。

²『現代語の助詞・助動詞』では、「ごとし」の終止形の用法は一般的にあまり用いられないことから連体形の「ごとき」が見出し語になっている。

菊地の調査では連用形「ように」が11,530例で53.1%，連体形「ような」が8,117例で37.4%，終止形「ようだ」が1,135例で5.2%であった。また，この傾向は文語の「ごとき」（「ごとし」）でも同様であった。

(6) 兎（と）に角（かく）そういういろいろの人間が，火と煙とが逆捲く中を，牛頭馬頭（ごづめづ）の獄卒に虐（さいな）まれて，大風に吹き散らされる落葉のように，紛々と四方八方へ逃げ迷っているのをごさいます。（芥川龍之介「地獄変」；J-FIG: a0692）

(7) その女の黒檀彫の古い神像のような美に打たれたばかりではない。（中島敦「夫婦」；J-FIG: a0147）

表5 助動詞の主な用法と用例数

助動詞	主な用法1	主な用法2	主な用法3
ようだ・ようです	連用形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。「ようです」は，丁寧な言い方。(334例)	連体形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。「ようです」は，丁寧な言い方。(199例)	終止形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。「ようです」は，丁寧な言い方。(11例)
た・だ	終止形-用法1-動作・作用が過去に行われた（経験を含む）という意味を表わす。(64例)	連体形-用法3-動作・作用（または，その結果）が継続して存在する状態にあることを表わす。「ている」「である」で置き換えることができる ³ 。(17例)	—
だ	連用形-用法1-断定・指定の意味を表わす。判断辞の代表的なもの。(44例)	終止形-用法1-断定・指定の意味を表わす。判断辞の代表的なもの。(26例)	連体形-用法1-断定・指定の意味を表わす。判断辞の代表的なもの。(18例)
ごとき	連用形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。文語的な言い方。(73例)	連体形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。文語的な言い方。(13例)	—
みたいだ・みたいです	連体形-用法1-ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。(10例)	—	—

判断を表す助動詞「だ」の連用形の用例数が多いが，その構文形としては「だっ」形の「に近いものだった」「のも同じことだった」「だったのです」等，「に」形の「くらいに」「ごとくに」「ほどに」等，「で」形の「のようで」「みてえなもんで」等がみられた。断定的な判断を示すよりは，ヘッジ表現と共に起して確信度の弱い判断を表す構文がよく用いられていたと言える。また，過去を表す助動詞「た・だ」の終止形，また結果状態を表す「た・だ」の連体形の用例も多くみられた。以上の結果は，テンス，アスペクト，モダリティに関わる助動詞が直喩の構文の主要な

³「ている」「である」に置き換えることができる「た・だ」とは，例えば「壁にかけた絵」のような用法であり，この場合は「壁にかけてある」と言い換えることができる。

構成要素になっていることを示している。

以上の結果は、本データベースによるアノテーションによって、直喩に用いられる助詞や助動詞の用法の偏りを精細に記述できることを例証している。

3.5 直喩の構文形

直喩の構文形は典型例が用例の大半を占めるのではなく、限られた少数の用例にしかみられない多種多様なタイプの構文形が多くみられ、その分布がいわゆるロングテールを持つという点に特色がある。

手順 1 で得られた構文形のタイプの総数は 520 タイプであり、用例が 20 例以上であったタイプは「A のような B」(44 例, 4.9%), 「A は B のように C」(43 例, 4.8%), 「A が B のように C」(32 例, 3.6%), 「A は B ように C」(25 例, 2.8%), 「A の B」(22 例, 2.5%) の 5 タイプであった。これらの典型的な構文形が含む助詞、助動詞の用法はすべて表 3, 表 5 に記載された用法であった。これに対して、用例が 1 例しかない構文形は 438 タイプ観察された。これは構文形の全タイプの約 84% を用例数 1 個の構文形が占めたことを意味し、用例数の少ない多種多様な構文形が直喩の用例に観察されたことを示している。用例数でも、用例数 20 例以上の上位 5 タイプの構文形が占めるのは全用例数の 18.6% にすぎず、用例数の少ない構文形の用例の集合が、全用例の多くの割合を占めていることが分かった。直喩の構文形の用例数の分布がロングテールをもつことは図 1 によって視覚的に理解できる。行ラベルはすべての構文形を示しているわけではなく、用例数の上位から 1 位 (「A のような B」), 7 位 (「A のように B-C」), 13 位 (「A ように B」), ... のように約 6, 7 タイプごとに構文形の例を表示している。

図 1 が例示しているように、用例数の少ない構文形には、助詞、助動詞の他に、様々な語彙的な表現が含まれている。品詞ごとに用例数が多い語彙的表現をみると、動詞では「ある」(50 例)「する」(36 例)「なる」(30 例)「いる」(23 例)「似る」(23 例)「見える」(21 例)、「思う」(17 例)「言う」(16 例)、形容詞では「ない」(18 例)「同じ」(8 例)「近い」(5 例)、副詞では「まるで」(35 例)「ちょうど」(16 例)「あたかも」(10 例)「いわば」(6 例)「ほとんど」(6 例)「何か」(5 例)、名詞では「もの」(29 例)「こと」(15 例)「気」(10 例)「気持ち」(7 例)などがみられた。構文形のなかに語彙的表現が含まれる直喩の用例を十分に分析するためには、『現代語の助詞・助動詞』のような文法形式の記述枠組みと『分類語彙表』のような語彙形式の記述枠組みを組み合わせ、文法と語彙の両面から直喩の構文形を記述していくことが必要であると思われる。

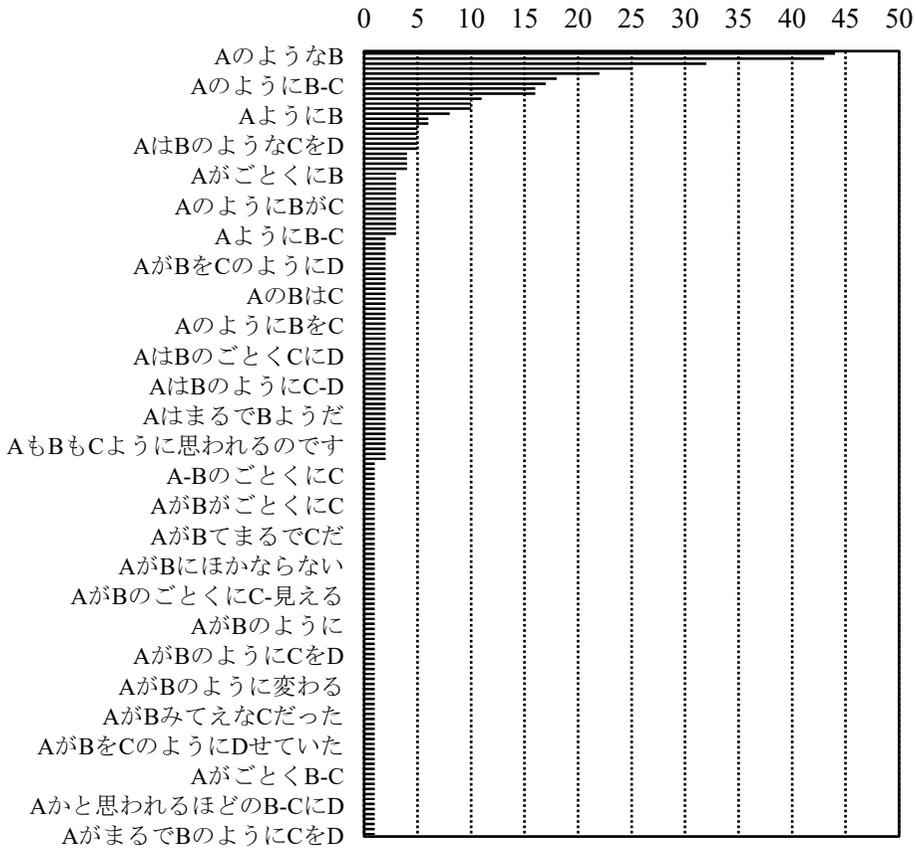


図1 直喩の構文形の使用例数

用例が1例しかない構文形の例としては、具体的には以下のような用例がみられた。各例の末尾の角括弧内に構文形を示す。

- (8) 自分は忠信狐ではないが、初音の鼓を慕う心は狐にも勝るくらいだ、自分は何だか、あの鼓を見ると自分の親に遇ったような思いがする、と、津村はそんなことを云い出すのであった。(谷崎潤一郎「吉野葛」；J-FIG: a0840)
[Aは何だかBような思いがする]
- (9) 私はかつて独逸のペツヒシュタインという画家の『市に嘆けるクリスト』という画の刷り物を見たことがあるが、それは巨大な工場地帯の裏地のようなところで跪いて祈っているキリストの絵像であった。その連想から、私は自分の今出ている物干しがなんとなくそうしたゲッセマネのような気がしないでもない。(梶井基次郎「交尾」；J-FIG: a1235)
[AがなんとなくBのような気がしないでもない]
- (10) 彼は女を寝床へねせて、その枕元に坐り、自分の子供、三ツか四ツの小さな娘をねむらせ

るように額の髪の毛をなでてやると、女はボンヤリ眼をあけて、それがまったく幼い子供の無心さと変るところがないのであった。(坂口安吾「白痴」; J-FIG: a1667)

[A がまったく B と変わるところがないのであった]

- (11) 彼の親戚は彼の弟に『彼を見慣え』と言いつづけていた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだった。(芥川龍之介「或阿呆の一生」; J-FIG: a1987)

[A は B には C のも同じことだった]

- (12) そしたためじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。(宮沢賢治「よだかの星」; J-FIG: a0119)

[A は B をまるで C から D ように E から F]

- (13) 彼等にとっては、空気の存在が見えないように、五位の存在も、眼を遮らないのであろう。(芥川龍之介「芋粥」; J-FIG: a0671)

[A にとっては B ように C も D]

(8) (9) のような感情や思考の表現, (10) (11) のような類似性や同一性を強調する表現, (12) (13) のような類推関係を明示する表現は、直喩の典型例を調査する研究では分析対象にならないことがほとんどである。確かにこれらは構文の形式としては生産的であるとは言えないが、意味的にはパターンがある可能性がある。語彙的な表現に加え、助詞、助動詞もこれらの構文形のなかで何らかの役割を果たしており、本データベースによるアノテーションは、直喩の典型例だけでなく、周辺例についても有益な示唆を与えることが期待される。

4. おわりに

本論文では、『現代語の助詞・助動詞』データベース版の内容を概観し、このデータベースの使用例として、任意の直喩の構文形に生起する助詞・助動詞の用法に関する体系的なアノテーションを行い、語形レベルでは見えない、用法別の頻度の偏りを記述した成果を示した。この成果は、本データベースが任意の日本語データに生起する助詞・助動詞の用法記述の一般的な枠組みとして使用できることを示す、具体的な研究事例として位置づけられる。

参考文献

- 柏野和佳子 (2006) 「『分類語彙表』の特徴と位置付け」『日本語科学』19: 143-160.
 菊地礼 (2021) 「比喩と助動詞の関係—『みだいた』と『ようだ』—」『大学院研究年報』50: 251-266. 中央大学文学研究科.
 国立国語研究所 (1951a) 『現代語の助詞・助動詞—用法と实例—』国立国語研究所報告 3. 東京: 秀英出版.
 国立国語研究所 (1951b) 『昭和 24 年度国立国語研究所年報—1—』東京: 国立国語研究所 /
 小松原哲太 (2016a) 『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学—』京都: 京都大学学術出版会.
 小松原哲太 (2016b) 「認識的モダリティとレトリック—推量と比喩のあいまい性—」『学研都市語用論研究論集』2: 13-32. 学研都市語用論研究会.
 Komatsubara, Tetsuta (2021) The Corpus of Japanese Figurative Language: Toward a comprehensive framework for describing figurative language. *Journal of Intercultural Studies* 55: 107-134. Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University.
 小松原哲太・田丸歩実 (2019) 「日本語における直喩の写像方略の類型」『日本認知言語学会大会論文集』19:

37–49. 日本認知言語学会.

Lakoff, George (1993) The contemporary theory of metaphor. In: Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 2nd edition, 202–251. Cambridge: Cambridge University Press.

中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 東京：秀英出版.

山崎誠 (2020) 『分類語彙表』の質的拡張の試み』『言語資源活用ワークショップ発表論文集』 5: 365–370.

山崎誠・藤田保幸 (2001) 『現代語複合辞用例集』 東京：国立国語研究所.

関連 Web サイト

国立国語研究所「分類語彙表—増補改訂版データベース」『言語資源開発センター』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/goihyo.html> (2022 年 4 月 14 日確認)

国立国語研究所・小松原哲太「『現代語の助詞・助動詞』データベース版」『国立国語研究所学術情報レポジトリ』 <http://doi.org/10.15084/00003531> (2022 年 4 月 14 日確認)

小松原哲太他 (編) 『日本語レトリックコーパス』 <https://www.kotorica.net/j-fig/> (2022 年 1 月 8 日確認)

Digitizing “Bound forms (*zyosi*’ and *zyodōsi*) in modern Japanese: Uses and examples”: Application in the Analysis of Simile

KOMATSUBARA Tetsuta

Kobe University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

We digitized the volume “*Bound forms (‘zyosi’ and ‘zyodōsi’) in modern Japanese: Uses and examples*” (The National Language Research Institute, 1951) as tabular data and made it available for the analysis of Japanese bound forms. In this paper, we describe how we digitized the volume and what content has been included in the database. We also applied the database as an annotation framework for simile analysis, using examples from The Corpus of Japanese Figurative Language (J-FIG). The database enabled us to analyze the data systematically. Consequently, we found that certain usages of bound forms were dominant in the examples of simile and that they formed patterns of grammatical construction. The results suggest that the database might be used as a general-purpose framework for describing how bound forms are used in Japanese sentences.

Keywords: *joshi*, *jodoshi*, simile, construction, The Corpus of Japanese Figurative Language